「指導」とは、導き方向を指し示すこと

あるメル友から、【　障害児の保護者は一気に何でもできるようにならないとも思うので、私たちはサポートの役割をしていかなければならないのだろうと思います。　】とのメールをいただいた。

そこで、いつものように厚かましく次のように返信、アドバイスした。
【　よく、人それぞれ、親もそれぞれという人がいます。それを全て認めると、何も言う必要はなくなります。それぞれの状況が異なることを認めた上で、その親の置かれている状況からの歩む方向を指し示て上げることは、プロとして大事でないかと思います。若い保護者ほど、得ている情報は少ないかも知れませんしね。

プロとは、ただ単に寄り添うだけでなく、その保護者の置かれている状況からの方向を指し示すことの出来る人でもあると思います。つまり、その保護者がどうした状況にあるかを見ぬき、どうした方向がさし当たり必要かを指し示し導くだけの教養、見識、知識、情報、等々の力量がプロに求められます。故にプロは、常に自らを錬磨、検証する姿勢が必要となります（未熟なだけに、周りに助けを求める勇気も必要です）。

私は、「指導」とは、強要でなく正に漢字の通り、「導」く方向を「指」で示すだけでないかと思っています。
もちろん、指し示した方向に納得できず、自らその方向に歩もうとしない保護者も当然いるでしょう。それはその時点での保護者の主体性であり、選択の自由でもあります。
しかし、プロから見て別な方向は先々子どものためには不味いのでないかと思うならこそ、更に寄り添い、保護者が主体的に納得・選択し、歩み始めるように導く作業の繰り返しが必要になると思います。

しばしば聞く言葉に、「保護者が同意しなかったので…」と、そこで係わりを切ってしまうプロが多いように思います。言い換えれば、自分の導く方向でなかったからと云って、私が常にいう「プロは、切ってはならない！寄り添い続ける覚悟をもて！」というは、こうした意味です。保護者のためのプロでなく、あくまでも子どもの存在、生活に対して支援出来るプロであるべきと思います。　保護者によっては、その子どもの最適な選択をしているとは限りませんしね。
障害児の場合、プロと保護者のこうした係わり合いのプロセスこそが、最近よく耳にする「地域で共に生きる（共生）」そのものでないかとも思っています。　】

（2004 年 11 月 30 日　記）